HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	E. Coseriu: 《Textlinguistik》(1980)をめぐって
Author(s)	川島, 淳夫
Citation	独語独文学科研究年報, 7, 1-11
Issue Date	1981-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25572
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_P1-11.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

E. Coseriu: 《Textlinguistik》(1980) をめぐって

川島淳夫

0. テキスト言語学の現状

テキスト言語学はZ.S.ハリス(1952)[1]やP.ハルトマン(1964)[2]などに萌芽が見られるが、ヨーロッパでテキスト言語学という分野が明確な形でスタートを切ったのは、生成文法が文の文法に終始しているのに対し、文より上のレベルの言語単位としてのテキストへの関心が高まった1970年代前後であった。とくにコンスタンツ大学で開催された「文を超える分析の可能性と方法」というテーマのコロキウム(1968年6月13日〜15日)において文学研究家(W. Iser, H.R.Jauß, W. Preisendanz)や言語研究家(P. Hartman, S.J. Schmidt, R. Harweg, E. Coseriuなど)の参加のもとに文学のテキスト・物語りの分析方法や一般に言語的テキストの分析方法について双方から歩み寄る形で討論がなされたのが契機となった。〔これについてはW.−D. シュテンペル(1971)[3]を参照されたい。〕

その後W.ドレスラー(1972)[4]の『テキスト言語学入門』が現われ、W.A.コッホ(1972)[5]の論文集が同年に出版されるなど、テキストをめぐる議論が活発となった。東独においてもStudia Grammatica XI(1976)[6], XVI(1977)[7]『テキスト文法の諸問題』でテキストと文のレベルを考察する論文集がでている。一方、W.ドレスラーの『テキスト言語学』(1978)[8]及び『テキスト言語学における最近の動向』(1978)[9]やH.ワインリヒ(1976)[10]などのテキストをめぐる論文集がでており、教材としてもK.カルマイアー等(1974)[11]もあり、UTBシリーズにも既に多くの論著がでているのである。〔H.F.プレット(1975)[12], S.J.シュミット(1973)[13], J.ロートマン(1972)[14], T.ズィルマン(1974)[15], E.ギュリッヒ/W.ライブレ(1977)[16], M.ティツマン(1977)[17]〕

文学と言語、あるいは詩学と言語学の接点としてはJ.イーヴェ(1971, 1972)[18], H.クロイツァー等(1965)[19], J.クリステーヴァ(1978)[20], リューウェ(1980)[21]等々、言語学からテキストへの、また文芸学からテキストへの接近が試みられている。R.ヤコブソン(1960)[22]が、言語学と詩学の研究は双方から接近されるべきことを強調したことやJ.ムカジョフスキー(1974)[23]のように、芸術における構造と機能(とくに美的機能)にはやくから注目し、文学側からの構造主義的接近を志向したものもあった。

ともあれ、テキスト言語学の諸問題は、10年の節目に当る1980年でひとまず整理される必要

がある。そうした時期にE. コセリウの『テキスト言語学』[24]が、その弟子J. アルプレヒトによってまとめられて、１９７７／７８の冬期講義録としてチュービンゲンのグンター・ナル出版社から≪ＴＢＬ１０９≫として出版されたのは時宜を得たものというべきであろう。このことはこのたび創刊された東独の『ゲルマニスティクのための雑誌』[25] ７号の巻頭を飾ったD. フィーヴェーガーの論文についても言えることである。

1. 『テキスト言語学』(1980)の構成

本書は「テキスト」の言語学、「テキスト」からみた言語学、修辞学、文体論との関連といったテキストの意味の定義に関する部分(第一章)と、「意義」の言語学としてのテキスト言語学、記号論的観点からみたテキストの位置づけ、テキスト言語学と一般言語学の関連といったものを扱う部分(第二章)、及び「文を超越したレベルを扱う文法としてのテキスト言語学」つまり言語構造の四つの特性「上位性」、「下位性」、「等位性」、「置換」について述べた部分(第三章)の三つの部分から成っている。全体として、著者はテキストとは何か、言語の構造の単位として語・文・テキストといった段階はどのように認識され、最上位のテキストはどのように構成され、どのように解釈されるべきかという問いに、具体的な例をもって答えようとしているのである。

1頁から4頁までには、序文と文献指示が与えられている。著名な研究家としてドイツ語圏では、W. ドレスラー, P. ハルトマン, R. ハルヴェーク, W. A. コッホ, W. クンマー, J. S. ペテフィ, W. ライブレ, S. J. シュミット, W. ーD. シュテンペル, H. ワインリヒ, フランス語圏では、R. バルト, A. グレマス, C. レヴィー＝ストロース, M. リファテル, アメリカではZ. S. ハリス, K. L. パイク, オランダではT. A. ファン・デイク, スウェーデンではN. E. エンクヴィスト, イタリアではA. パリアロが挙げられている。入門書としてはまずこの程度のことでよい。しかし、本文中では、R. ヤコブソン, H. A. グリースン, H. イエルムスレウ, J. L. オースティン, O. イエスペルセン, A. マルチネー, W. M. アーバン, F. ド・ソシュール, E. フッセルル, H。ラウスベルク, I. イーヴェ, T. A. シビオク, B. マルムベリー, Ch. J. フィルモア, L. ブルームフィールド, D. D. ボーリンジァ, L. シュピッツアー等々、言語学、論理学、哲学、文体論などの学者が広く引用され、さながら、言語学入門書に近い様相を呈している。とくにコセリウ自身の著述への言及も少なくなく、本書を通じてコセリウの言語学を知ることができるといっても過言ではない。〔これについては、末尾の文献表を参照されたい。〕著者が自分の著作にこれほど多く触れなければならない理由は何かということを考えてみると、テキスト言語学というものの入門が同時に言語学への入門でもあるのだ、ということに気づくのである。事実、意味の問題を扱う章節において、G。フレーゲ, K. ビューラーの意味論に対し、コセリウ自身、独自のBedeutung(意味), Bezeichnung(表示), Sinn(意義)の区別を行なっていることからも、このことは容易にうなづけるところで

ある。

2. テキストとは何か

上述のように、テキストに関する研究は、最近、増加の一途をたどっているが、テキストとは何か、というとその定義も種々様々である。このことはコセリウも指摘しているところであるが、コセリウ自身の考えているテキストは、文より上の言語単位といったたんなる統語的単位ではなくて、言語の三つのレベルの一つと考えられている。すなわち、言語は1) das Sprechen im allgemeinen（人間が話すという行為一般），2) die Sprachen（英語、ドイツ語、日本語といった史的に存在する個別言語），3) die Sprechakte（或る人が他の人に何かを伝えるという交信的な発話行為）という三つのレベルにおいて捉えられるもので、第一のものは一般に人間の語る行為であり、第二のものは、複数形で呼びうる英語、ドイツ語といった個別言語であり、第三のものは、或る人が或る人に対してある発話場面で発話するという具体的なコミュニケーションの実現の行為である。テキストというのは、この第三の言語のレベルに属するものと考えられている。最近、D. フィーヴェーガーが「テキスト言語学の方法論的諸問題」（１９８０）の中で、テキストについての研究状況を述べた後で、テキストを二つの系列に分けているが、それによるとテキストは命題的なもの（propositional）と交信的なもの（kommunikativ）に分けられるのであるが、コセリウのテキスト概念は、K. ビューラーのオルガノンモデルを修正したものから出発しているので、必然的にコミュニケーションの過程として捉えられるものである。この点ではたしかにH. ワインリヒのテキスト概念に近いのであるが、コセリウにあっては、テキストの統語的構造が問題なのではなく、テキストの全体として受信者に対して担っている意義の解釈に重点が置かれているのである。命題的テキスト・モデルでは、文の結合など、文法上の規則の面からテキストの構造が問われるのに対し、コセリウの交信的テキスト・モデル（或は発話行為理論的テキスト・モデル）にあっては、発信者の提出するテキストが、いかなる意義の階層的分節Artikulation des Sinns を形成して、全体的にテキスト記号 Textzeichen としてテキスト意義 Textsinn を受信者に対して担うかが解明されなければならないとする。この意味でコセリウのテキスト言語学はまさに解釈学なのである。

テキストの大きさは問題でない。Guten Morgen, Herr Bäcker ! も一つのテキストであり、物語りも手紙も小説もテキストである。テキストは記号の集合であって、さまざまな記号間の関係から成り立っている。より小さい記号とより大きい記号の結合として、記号の意味の集積したものであり、同時にまたテキスト記号として「意義」を担っているのが、テキストの特性である。コセリウは記号全般について、先にも述べたように、「表示」と「意味」と「意義」を区別するが、これらは記号の内容 Inhalt に属するものであり、記号の意義は受信者（聞き手・読み手）によってさまざまに解釈される可能性を含んでいる。それは発信者（話し手・書き手）の側からすれば一義的なものと

して受信者に向けられるものである。意味と意義が一致することもあるが、現実には意味と意義は必ずしも一致するものではない。なぜなら、コセリウのいう意義とはテキストの機能 Textfunktion として存在するものであり、illokutive Kraft（発話内在的な力）と同義のものだからである。たとえば、Wollen Sie die Tür schließen？という文（そしてこれだけで一つの立派なテキスト）は、疑問文で文字通りの意味と同時に「要求」という意義を担っている。コセリウのテキスト言語学というものは、一つの文からなるテキストであれ、文の集合からなるテキストであれ、反復談話 Wiederholte Rede（たとえば、きまり文句、諺、格言など）であれ、詩でも小説でも全体としてどのような意義（これは前にも触れたように複合的意義もありうる）をもつかを解釈することをもってその課題としているのである。たとえば、カフカの『変身』という物語りの中で、「変身」とはいかなる意義があるのかが問われるのである。

すべてのテキストには意義がある。日常生活において語られる言葉にも、文学作品にも意義がある。しかし、意義のある表現がすべて文学的テキストであるとはいえない。コセリウの挙げている次のいくつかの文の集合は、いずれもテキストであり、前者(1)は「報告」という意義があるにすぎず。単調で内的関連性がないが、後者(2)は、少し気転のきいた表現の追加によってより文学的な価値の高いものとなっている。つまり意義が変ったのである。

(1) Ich habe Häuser gesehen, ich habe Wälder gesehen, ich habe einen Fluß gesehen, ich habe Menschen gesehen, ich habe Tiere gesehen.

(2) Ich habe Häuser gesehen, ich habe Wälder gesehen, ich habe einen Fluß gesehen, ich habe Menschen gesehen, ich habe Tiere gesehen, Gott habe ich nicht gesehen, ich habe den Tod gesehen.

前者は単なる枚挙、羅列であるが、後者は新しいコンテキストの中で、まったく別の意義を得て、一つの新しい統一体となっている。これはテキストの凝集性 Kohärenz の問題とかかわることであるが、コセリウは、テキストのまとまりのよって来たる源泉を、このように、意義の有り様の中に捉えようとしていることがわかる。

こうしたコセリウのテキストに対する根本的姿勢の当然の帰結として、この本の大部分、すなわち、講義の大部分は Textlinguistik als Linguistik des Sinns にあてられているのである。

コセリウが１９５５／５６年に「言語理論と一般言語学」という論文をドイツで発表した（Romanisches Jahrbuch Ⅶ, S. ２９－５４）中で、すでに Textlinguistik または Lin-

guistik des Textes という概念を初めて導入したわけだが、コセリウ自身謙遜して個人の名声が重要なのではなく、真理を求める学問そのものが重要だとして、この名称を誰が一番先きに導入したかは問題でないとしているとはいえ、テキスト言語学の可能性を予想し、Bezeichnung, Bedeutung, Sinn を区別し、Sinn の言語学こそが真の言語学であるとしたのはコセリウの功績である。この三つの概念はコセリウの言語観圏の根底にある基礎的概念であるが、テキストの意義と言語の意味と表示について、コセリウは次のように述べている。

„Die Gesamtheit der Funktionen der Sprache überhaupt, des Sprechens im allgemeinen, d.h. die Gesamtheit der Funktionen, die die Bezeichnung von Gegenständen und Sachverhalten in der „Welt" betreffen, kann als eine Art des sprachlichen Inhalts angesehen werden. Ich nenne diese Art des Inhalts *Bezeichnung*. Die Gesamtheit dessen, was eine bestimmte Sprache als solche ausdrückt, die Gesamtheit dessen, was allein durch die Sprache, durch eine bestimmte Sprache verstanden wird, kann wiederum als eine besondere Art des sprachlichen Inhalts angesehen werden. Es ist die Art des Inhalts, die ich *Bedeutung* nenne. Und die Gesamtheit der Textfunktionen schließlich, die Gesamtheit dessen, was gerade durch den Text und nur durch den Text verstanden wird, die Gesamtheit der Inhalte, die nur als Textinhalte gegeben sind, wollen wir *Sinn* nennen. (S. 47)

コセリウのいう Inhalt（内容）は上位概念で、これが Bezeichnung（表示）とBedeutung（意味）とSinn(意義）に分化し、意義はテキストによって理解されるものの総体であり、テキスト内容としてのみ与えられているものの総体と考えられる。これは図式的に次のように表わされる。

Welt（世界）	Bezeichnungsfunktion（表示機能）	Bezeichnung（表示）	Inhalt（内容）
Einzelsprache（個別言語）	einzelsprachl. F.（個別言語機能）	Bedeutung（意味）	
Text（テキスト）	Textfunktion（テキスト機能）	Sinn（意義）	

日本語としては、表示内容、意味内容、意義内容と表現するのがよいであろう。語や副文などは意味内容があるが意義内容をもたないわけである。ただし、一つの語がText としての機能をもてば意義内容をもつことになる。たとえば、「火事」という単語は「家などの燃えること」という意味内容があるが、これが或る人によって或る人に対して叫ばれ、「火事ノ火事ノ」となれば、「家が燃えていること」のほかに「危険」、「警告」などの意義（内容）をもつことになろう。テキストは、或る人によって或る人に向けて発せられるが、それはある場面で、ある状況で、ある文脈（脈絡）で発せら

れる。すなわち Text には必ず Kontext が伴うのである。Situation, Kontext などの包括的概念として、コセリウは Umfeld（環境）という用語を用い、この関係を次のように図示している。（S。94）

Umfelder （諸環境）

Ⅰ Situation（場面） — unmittelbar （直接的）

— mittelbar （間接的）

Ⅱ Region （区域） — Zone （地 域）

— Bereich （領 域）

— Umgebung （周 囲）

Ⅲ Kontext （脈絡）

	間接的	直接的	
—a) einzelsprachlicher Kontext 個別言語的脈絡（文脈）			positiv
—b) Rede-Kontext 談話脈絡（話脈）			negativ

—c) Außer-Rede-Kontext 談話外脈絡

1. physikalisch
2. empirisch
3. natürlich
4. praktisch oder okkasionell
5. historisch
6. kulturell

	partikulär	universell	
			aktuell
			vergangen

Ⅳ Redeuniversum（談話世界）

テキストはこれらの諸環境の中に現われる。Umfeld という用語は K. ビューラーからのものであるが、Region（Zone, Bereich, Umgebung）はコセリウの用語で、Zone とはある記号 Zeichen がその中で知られ用いられている区域で、大略史的言語に相当する。Bereich とは、記号表示されたもの das Bezeichnete が話し手の日常生活の世界の親しみある対象、たとえば、「家」のようなものである区域である。これは一般、文化的なものである。これに対し Umgebung というのは「家族」、「学校」、「職業共同体」（職場）あるいは階層（Kaste）のような社会的あるいは文化的に規定された区域である。テキストの形式や内容はこれらの区域のうちどこで用いられるかによって異なってくる。「家族」のような周囲の環境では、ich「私」の代りに Mutter や Vati が使われる。日本語でも「自分」のことを「お父さん」といい、「お母さん」、「お姉さん」などというが、妹の身分の人は自分をさして「妹さん」とはいわない。「お父さん」は他人の「お父さん」又は「自分」をさし得るが「妹さん」「弟さん」は他人の妹、または弟をさしうるが発言者自

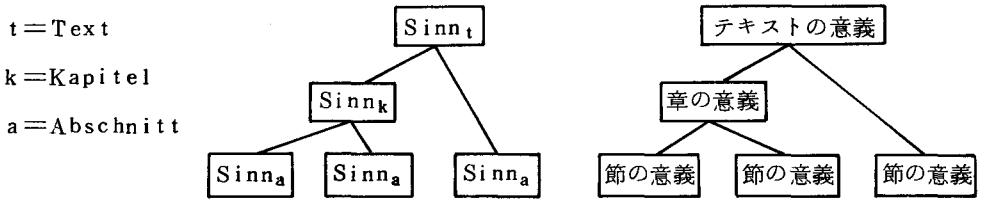
身をさすことはできない。「お父さんは知らないよ」というテキストは「私は知らない」と同義でありうるが、「お父さんはご存知ない」は、「あなたのお父さんはご存知ない」のであって、「私は知らない」と同義ではない。後者は「弟さんはご存知ない」というテキストと同じ環境において用いられるのである。ある人の弟が自分を指して、「弟さんは知らないよ」とはいえない。要するにあるテキストはある Umgebung においては使用されるが、その他の Umgebung では使用できない場合があることがわかる。

コンテキストは言語的コンテキスト、談話脈絡、談話外脈絡に分かれるが、この Rede-Kontext と Außer-Rede-Kontext が、テキストの中に意義が成立することを理解する上で、とくに重要である。談話脈絡ではテキスト部分の前・後にあるテキストが重要視される、談話外のコンテストは、物理的、経験的、自然的、実践的または臨時的、歴史的、文化的に分けられる。いま歴史的な談話外脈絡を見ると、１９１８～１９３９年の間では、１９１４～１９１８年の戦争の出来事をいうとき、一般に「世界大戦」といった。これに対し、１９４５年以降は自動的に「第一次世界大戦」というようになった。これによって、どのテキストがいつ書かれたかがわかるのである。つまりテキストは歴史的談話外脈絡において現われることになる。談話世界とは神話とか文学とか学問、数学などの世界で、これらはわれわれの談話のテーマとなりうるかぎりにおいて、談話世界となる。テキストはどのような環境で、あるいはどのような世界で使われるかによってその性格がきまる。その結果さまざまなテキストの種類 Textsorte が生まれる。言語にさまざまな類型があり、語族 Sprachfamilie があるように、テキストにもテキストの族 Textfamilie がある。送り状、果し状、推薦状、願書、申込書、証明書などの書・状はその一例である。テキストの種類はしかし、コセリウのテキスト言語学では重要な位置を占めていない。重要なのはテキストのもつ機能である。すなわちテキストがどのようなコンテキストにおいて、どのような意義をもつに至り、どのような効果を生むかということにむしろ大きな関心がよせられている。

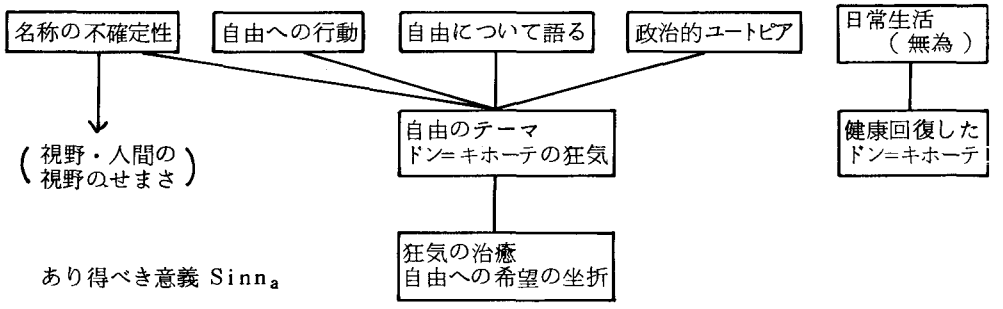
一例として Don Quijote ドン＝キホーテの意義、その悲劇性は何かということが述べられているので、取り上げてみたい。（もちろんこのほかに、カフカの『変身』や、アイスキュロスの『アガメムノン』、サッポーの『第五の書』、アイスキュロスの『ペルシャ人』、アルゼンチンの民謡などの分析がなされている。）

コセリウは Leo Spitzer の文体論にテキスト言語学の萌芽を認めながら、シュピッツァーがドン＝キホーテの解釈に際して直観的に感じ取った Polyonomasie つまり名称の不安定性、（一人の登場人物にいろいろな名前がつけられていること）に注目する。この名称の不確定性はドンキホーテの注目すべき特徴だというのである。つまり、このテキストの中にみられる一つの特性である。しかしコセリウはここで自問する。この解釈はこの作品全体に妥当するのか、ほんとうにこの小説の意義なのか、それともこれはむしろこの小説の構成要素なのか、それともこれはむしろこの小説の構成

要素のもっている意義ではないのか、その構成要素はより高いレベルで分節された意義の一員にすぎないのではないかと。そうして、この名称の不確定なことはその他のさまざまな要因の中の一つの事実であって、それらの事実との関連において正しく理解されうるものであると考える。ドン＝キホーテは実は自由を謳った詩なのだ。自由こそがこの小説の本来のテーマなのだ。ドン＝キホーテの悲劇は自由のための戦の可能性が制約を受けていることにある。この自由が英雄の誇大妄想と不可分に結びついていることそしてこの英雄がまさに自分が健全になったと思ったその瞬間に自由を求めることを放棄してしまう点にある、という。コセリウは、シュピッツァーの解釈に関連して「意味の分節」の問題をとり上げようとしたのである。彼はテキストの領域においても、個別言語の領域と同様に構成のレベル Ebenen der Struktuierung があるという仮定から出発している。つまりテキストは、テキスト全体の意義、テキスト部分の意義、テキスト部分の部分の意義というように下へ向って枝分かれし、これら分節された諸意義が一つの構造をもって全体の意義が成立すると考えるのである。これを図式的に示すと次のようになる。



ドン＝キホーテの正しい解釈は次のようになるという。（S．１２８）



こうして、ドン＝キホーテというかなり大きなテキストは、テキストに内在する諸意義の諸特徴から相互の関係が解明され、それによってテキスト全体の意義が解釈されたわけである。これがコセリウの目ざすテキスト言語学の目標であった。コセリウはここに至るまでに、記号の機能、そして記号の複合体としてのテキスト記号の機能を、ビューラーのオルガノンモデルを検討し、R．ヤコブソンのつけ加えた美的機能を批判し、L．イエルムスレウの Konnotation（そしてコセリウの用語で

Evokation ）を導入することによって、テキスト解釈を裏打ちしようと企てたのである。

3. おわりに

詩についての発言も見逃せない。詩的言語と日常言語といった表現があるが、コセリウはこれをきっぱりと否定する。詩的言語というものはなく、あるのは詩における頻繁な逸脱だけである。これはたしかに日常語より目立つが、日常語にも逸脱はある。詩が日常言語の規範から逸脱しているのではなくて、詩には逸脱した表現があるにはあるが、大切なのはこの逸脱が規則性をおびている点である。これは卓見というべきであろう。

Auch die sog. „Abweichungstilistik“ richtet ihr Augenmerk nicht auf die „Abweichungen“ als solche, sondern auf die *Regelmässigkeiten* innerhalb dieser angeblichen Abweichungen. Und diese Regemäßigkeiten der Abweichung sind nichts anderes als das, was im Text unmittelbar auffällt.（S. 119）

最後に、第三章の文のレベルを超える文法としてのテキスト言語学は、上位性、下位性、等位性、置換という四つのテキスト構成上の特徴を述べこれらはまだどの言語についても十分には叙述されていないが、System と Norm のレベルである程度完全な記述ができるであろうというにとどまっている。

いずれにせよ、この『テキスト言語学』は、言語学からの文学作品分析への道を開いている点で注目すべきものであるといえよう。T. van Dijk の近著„Textwissenschaft“（1980）とともに一読に値いするものである。

注

1) Harris, Z. S. : Discourse Analysis. In : Lg. 28/1952, 1-30.

2) Hartmann, P. : Text, Texte, Klassen von Texten. In: Bogawus, Zeitschrift für Literatur, Kunst, Philosophie. 2/1964, 15-25.

3) Stempel, W.-D. (Hg.) : Beiträge zur Textlinguistik, München : W. Fink Verlag 1971.

4) Dressler, W. : Einführung in die Textlinguistik. Tübingen : Niemeyer 1972.

5) Koch, W. A. : Strukturelle Textanalyse — Analyse du récit — Discourse analysis. Hildesheim : G. Olms 1972.

6) Studia Grammatica XI (1976)

7) Studia Grammatica XVII (1977)

8) Dressler, W. (Hg.) : Textlinguistik. Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1978.

9) Dressler, W. (Hg.) : Current Trends in Textlinguistics. Berlin : Walter de Gruyter 1978.

10) Weinrich, H. : Sprache in Texten. Stuttgart : E. Klett 1976.

11) Kallmeyer, K. u.a. : Lektürekolleg zur Textlinguistik. 2 Bde. Frankfurt/M. : Athenäum 1974.

12) Plett, H. F. : Textwissenschaft und Textanalyse. (1975)

13) Schmidt, S.J. : Texttheorie. 1973.

14) Lotman, Ju. M. : Die Struktur literarischer Texte. 1972.

15) Silman, T. : Probleme der Textlinguistik. 1974.

16) Gülich, E. u. W. Raible : Linguistische Textmodelle. 1977.

17) Titzmann, M. : Strukturelle Textanalyse, 1977.

18) Ihwe, J. : Linguistik und Literaturwissenschaft. In : Linguistische Berichte 3, 30-34.

Ihwe, J. : Literaturwissenschaft und Linguistik. I, II, III, Frankfurt a. M. : Athenäum 1971/72.

19) Kreuzer, H. u. R. Gunzenhäuser. : Mathematik und Dichtung. München : Nymphenburger 1965.

20) Kristeva, J. : Die Revolution der poetischen Sprache. 1978.

21) Ruwe, N. : 「言語学と詩学」『言語』11. 第九巻. 1980, 74-90.

22) Jakobson, R. : Linguistics and poetics. In : T. A. Sebeock (Hg.) : Style in Language. Cambridge, Mass. 1960, 350-377.

23) Mukařovský, J. : Über Strukturalismus. 〔On strukturalismus 1946〕 In : Falker, A./V. Žmegač : Formalismus, Strukturalismus und Geschichte. Kronberg/T. : Scriptor Verlag 1974, 86-99.

24) Coseriu, E. : Textlinguistik. Eine Einführung. Tübingen : G. Narr Verlag 1980.

25) Viehweger, D. : Methodologische Probleme der Textlinguistik. In : Zeitschrift für Germanistik, 1/1980, 6-20.

コセリウの著作で『テキスト言語学』に引用され、または指示されたもの。

1. Coseriu, E. : Die Lage in der Linguistik. Innsbruck 1973.
2. Coseriu, E. : Sincronia, Diacronia e Historia, 1. Auflage Montevideo 1958. 3. Aufl. Madrid 1978. deutsch von H. Sohre, München 1974.
3. Coseriu, E. : Die Geschichte der Sprachphilosophie von der Antike bis zur Gegenwart. Bd. 1. Tübingen² 1975.
4. Coseriu, E. : Probleme der strukturellen Semantik. Tübingen 1973.
5. Coseriu, E. : „ Historische Sprache “ und „ Dialekt “ In : Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik, Beiheft NF, Nr. 26 (1980), 106-122.
6. Coseriu, E. : „ Zur Sprachtheorie von Juan Luis Vives “ In : Aus der französischen Kultur-und Geistesgeschichte (Festschrift Walter Mönch), Heidelberg 1971.
7. Coseriu, E. : „ Logique du langage et logique de la grammaire “ In : J. David/R. Martin (Hg.) : Modèles logique et niveaux d'analyse linguistique. 1974.
8. Coseriu, E. : Thesen zum Thema „ Sprache und Dichtung “ In : W.-D. Stempel (Hg.) : Beiträge zur Textlinguistik, München 1971, 183-188.
9. Coseriu, E. : Einführung in die strukturelle Linguistik (Vorlesungen gehalten im W. S. 1967/1968 in Tübingen.
10. Coseriu, E. : „ Coordination latina y coordinación románica “ In : Acta del Ⅱ Congreso Español de Estudios Clásicos. Madrid 1966. Bd. Ⅱ, Coloquio de estudios estructurales sobre las lenguas clasicos, Madrid 1968, 35-57.
11. Coseriu, E. : Sprache, Strukturen und Funktion. Tübingen² 1971.

（岩手大学教授）